

原著論文

蜻蛉日記上巻 長歌後の「駒」の贈答歌

柴村抄織 (教育学科・准教授)

要旨

『蜻蛉日記』上巻の道綱母の長歌のあとに、兼家の長歌が返されている。この兼家の長歌では、道綱母を朝廷所管の「御牧」の「馬」に喩えている。

長歌後の贈答歌四首全てに「駒」「馬」が詠み込まれ、駒に関連した和歌表現で贈答歌が作られている。蜻蛉日記の「馬」「駒」の表現の特質は、長く培われてきた伝統的な表現である。「駒」「馬」の表現の調査によって、贈答歌の新解釈を行った。

キーワード 蜻蛉日記、表現、駒

はじめに

『蜻蛉日記』上巻の道綱母の一二三句の長歌のあとに、兼家の八九句の長歌が返されている。この兼家の長歌では、道綱母を朝廷所管の「御牧」の「馬」に喩え、道綱を「かたかひの駒」に喩えている。この「馬」「駒」が、すぐ後の贈答歌四首全てに詠み込まれ、駒に関連した和歌表現で贈答歌が作られている。

道綱母は、①なぜ朝廷所管の「御牧」の「馬」に喩えられているのか、また、②「馬」「駒」をなぜ男性ではなく女性の道綱母に喩えているのか、ということについて、和歌表現から考え、長歌後の贈答歌を「御牧」の「馬」として、また馬に喩えられた女性としての表現効果を考察する

必要がある。

一 長歌

『蜻蛉日記』上巻の「思へただ むかしもいまも わが心」で始まる一二三句の道綱母の長歌には、これまでの二人の愛情に関連した時間と情景が相俟って、道綱母の迫りくるような強い表現となっている。兼家の八九句の長歌の返しも「折りそめし」から始まり、これまでの二人の時間を振り返ることになる。兼家からの長歌の返しによって、初めて、道綱母は、「御牧」の「あるる馬」に喩えられる。「かひなきことは 甲斐の国 速見の御牧に あるる馬を いかでか人は かけとめむと 思ふものから たらちねの 親と知るらむ かたかひの 駒や恋ひつつ いなかせむと 思ふばかりぞ あはれなるべき」というように、道綱母は、「甲斐国巨麻郡速見へみ(和名抄)」の朝廷御料の牧場である、甲斐の国の「御牧の馬」に喩えられている。この長歌の後に贈答歌四首では、各地の馬と朝廷の行事に関連した駒の行事が詠み込まれてくる。贈答歌の和歌表現に「御牧」の「馬」の表現の意味を問うことが重要となる。

二 長歌後の贈答歌四首

長歌の贈答で詠まれた時間性と心情の昂揚の後に、贈答歌では、「頼みきにける」と道綱母がこれまでの時間性を兼家に問い、兼家は「あま

たの日をばひきわたりつる」と答えている。長歌に詠まれている過去のらの時間性を持ちながら、贈答歌四首では、「駒」が詠み込まれ、現在の二人の関係を表わしている。この長歌後の贈答歌四首の解釈と、「御牧の駒」の機能①朝廷所管の御牧の馬、②女性を馬に喩えること、について考察する。

贈答歌四首があるのは、天徳元（九五七）年十月～応和二（九六二）年五月の記事で、このあたり年次が明確ではないところでもある。長歌の前には、結婚後、道綱母の父の陸奥への赴任、道綱の誕生の他に、姉との別離、町の小路の女が兼家の寵を失うことが書かれている。そして、長歌があり、その後に贈答歌四首がある。贈答歌四首の後は、「天の川」の道綱母の歌が一首あり、兵部卿宮章明親王との和歌のやりとりとなっている。

本稿で取り扱う長歌後の贈答歌四首であるが、四首全てに「駒」「馬」が詠み込まれ、御牧の地名や駒牽きの地名、馬関連のことばで詠まれている。

使ひあれば、かくものす。（二一九頁～二二〇頁）

なつくべき人もはなてば陸奥のむまやかきりにならむとすらむ
（道綱母六〇）

いかが思ひけむ、たちかへり、

われが名を尾駁の駒のあればこそなつくにつかぬ身とも知られぬ
（兼家六一）

返し、また、

こまうげになりまさりつつなつけぬをこなはたえず頼みきける
（道綱母六二）

また、返し、

白河の関のせけばやこまうくてあまたの日をばひきわたりつる
（兼家六三）

長歌との関係を見ると、長歌で、兼家が道綱母のことを「あるる馬」に喩え、道綱を「かたかひの駒」に喩えている。美貌で和歌の才能がある道綱母を朝廷所管の御牧にいる「あるる馬」に喩えたのは、その美質に惹かれながらも、対応に困っている姿でもあり、性格の「あるる」ところを喩えによって指摘した。この喩えを受けて、四首の贈答歌が「駒」を詠み込んでいる。

道綱母六〇番歌で、長歌で馬に喩えられた自分を「陸奥の馬」と詠み、兼家六一番歌では、「陸奥の馬」に対応して、今度は兼家が「尾駁の駒」になっている。「尾駁」は、歌枕で、青森県尾駁にあった牧場で、『八雲御抄』第五名所部「牧」の条に「をふち」とある。これを受けて道綱母六二番歌では、「来ま憂げに」と「駒うげに」掛けて、返している。

兼家六三番歌では、「白河の関」として、福島県白河市旗宿付近にあった関所を出し、陸奥から馬をひいて上京する駒牽きの行事にたとえている。東国の馬は秋に都へ引いて来た。朝廷へ献上したり、貴族に贈ったりするために、奥州から良馬を引いて上洛するというこの当時よくあった状況で、その最も有名なものは八月の年中行事「駒牽」である。白河の関は、道綱母を喩える。第二句は、関所で検査するため通行人を止める意に、作者が不機嫌で兼家を心よく通さない意をかける。長歌と贈答歌四首の構成は次のようになっている。

長歌 五八 道綱母長歌
長歌 五九 兼家長歌 「甲斐の国 速見の御牧に あるる馬」

道綱母
「かたかひの駒」 || 道綱

◎贈答歌 六〇 道綱母歌 「陸奥の馬」 || 道綱母

「人（馬を世話する人）」 || 兼家

六一 兼家歌 「尾駁の駒」 兼家 「駒」 道綱母 説

あり

六二 道綱母歌 「駒」…来ま(憂げ)

六三 兼家歌 「白河の関」「駒」…来ま(憂く)

この長歌と贈答歌との関係について、先行研究をみると、三つに大別される。第一番目は、長歌と連続しているとす⁽⁵⁾⁽⁶⁾。これは、「駒」の関連では確かに続いている。が、この続き方が検討課題なのである。第二番目は、長歌に直接引き続いていないとする⁽⁷⁾⁽⁸⁾。第三番目は、単純に連続した歌の応酬としない。「長歌とこの一段との間に存在する断層を明確に浮き出させる。両者は内部的に深いつながりを持ちながら、それぞれに別個の心象風景として書き継がれているのであって、それを単純に連続した歌の応酬としてのみ読過したのでは、やはり不十分といわざるをえないであろう。」と、単純な歌の応酬ではないとしている。長歌とその後⁽⁹⁾の贈答歌四首の関係を抑えておく必要がある。また、断層の内容についても明確にしたい。

それから、贈答歌の検討課題としては、六一番の和歌の「われ」が兼家を指すのか、それとも道綱母を指すのか解釈が揺れている。全注釈の余説⁽¹⁰⁾に、「兼家を『なつくべき人』といい、その飼育者から見放された馬に自身を譬えた。」とされ、「作者の譬えとは逆に、兼家自身を馬に、作者を飼育者に譬え、飼育者がやさしくすれば馬も寄りつこうという。作者の考え方と裏腹であり、馬を手放す気のないことも同時に表明している。」とあり、喩えが反転することを指摘されている。

そして、贈答歌四首には「駒」の情景が、道綱母と兼家によって、詠まれている。秋山虔先生は、「古歌(詩)のイメージによって個の内部経験が言葉の秩序にかたどられるものとして照らし出され、そのことばの秩序として外化されたそのかたちによって指示される基調のうえに、さらに掘り起こされる内部経験が、状況としてのことばの世界を形成す

ることになるのであった。」となさっている。このご指摘の「古歌のイメージと個の内部経験」について、その後、それを検証する論考が出てきている。続けて、個々の検証の必要性があるだろう。本稿では、「御牧の駒」の機能について、検証する。優れた歌人である道綱母の日記には、歌人がそれまで自己のなかに持っていた和歌に関することば、本稿においては、「駒」が、実際の状況のなかでどのように展開され、経験となり、それがまた新たなことばとなって、どのように情景が繰り広げられているのか、詳細に理解することができる。

三 甲斐の国の「駒」

長歌後の贈答歌には「馬」、そして「馬」の歌語である「駒」が使用されている。「駒」の語源は、小馬の約で、和歌で、馬のことをさすようになつた。まずは、意味の基本になるが、交通手段としての「駒」が挙げられる。兼家の長歌に詠まれた「甲斐の国」の「駒」は、「御牧の駒」として、早くから詠まれている。

81 むば玉の 甲斐の黒駒。 鞍著せば 命死なまし

農播陀磨能 柯彼能矩盧古磨 矩羅枳制播 伊能致志儺磨志

甲斐の黒駒

柯彼能矩盧古磨

(日本書紀歌謡 雄略天皇) がある。雄略天皇の81番の歌謡には、天皇の使いが、納められた甲斐の黒駒に乗り、木工の真根を救す意を伝え、間に合ったときに「駒」が使われている。もし、ゆっくり鞍をつけて走っていたら、あは速く行けないから、命は失せていたろう。あの甲斐の黒駒こそありがたい。というように、御牧のひとつである甲斐の馬が歌に詠まれている。天皇の使いの馬だからこそ、間に合ったと詠まれている。

る。甲斐の黒駒は、速さと天皇の使いとしての貴さが表れている。

他に、天皇の馬の意味としての「駒」、天皇の使いとしての「駒」としては、「128 赤駒の い行き憚る 真葛原 何の伝言 直にし良けむ (万葉集 3069 にあり) 阿箇悟馬能 以喩企波々箇屢 麻矩儒播羅 奈爾能都底拳騰 多陀尼之曳鶏武 (日本書紀歌謡)」がある。天智天皇の殯のときの童謡 (民間に流行した風刺中心のうた、社会思想を表す) で、「駒」は連絡をする交通手段としての使いを表している。「駒」は、天皇の使いとして使われ、81番では、特別な「駒」であるからこそ、間に合ったとされている。道綱母は、この「甲斐の国の駒」に喩えられたのである。

四 恋歌の「駒」

では、恋歌の「駒」であるが、単なる交通手段からまた発展し、万葉集、古今集、後撰集以降には、逢瀬の交通手段としての「駒」、道を憶えている「駒」となって詠まれている。恋人のもとへ運んでくれる交通手段、道を憶えている「駒」として、万葉集の例がある。

- 1271 遠有而 雲居尔所見 妹家尔 早将_レ至 歩黒駒 (万葉集)
とほくして くもにみゆる いもがいへに はやくいたらむ あゆめくろこま
 卷七 柿本人麻呂

愛しい恋人の元へ早く行きたい気持ちが表れている。

後撰和歌集卷第十三 恋五 (大和物語五十六段では、ことばが少し違う。平兼盛と兵衛の君) の例は、恋人のもとへ運ぶ「駒」が道を憶えている、自然と恋人の元へ向かう表現となっているのである。

- 978 夕闇は道も見えねど旧里は本来し駒にまかせてぞ来る
おもひ 忘れにける人のもとにまかりて
 返し

- 979 駒にこそまかせたりけれあやなくも心の来ると思ひける哉

女性の元へ向かう男性は、夕方暗くなって、道もみえないところを、以前通いなれた馬にまかせてやって来た、と伝えるが、女性の方は、自分を思う心ではなく、馬の歩みにまかせておいでになったと返している。馬が道を憶えていることについては、他にもみられる。『和漢朗詠集 (公任撰)』 卷下 683 (『千載佳句』大江維時撰にあり) の例である。「雪の中に馬を放ちて朝に跡を尋ぬ 雲の外に鴻を聞いて夜声射る 雪中放馬朝尋跡 雲外聞鴻夜射声 羅虬」老馬を放して、道をたどる。馬は、道を憶えているものとされている。これは、古今和歌集、後撰和歌集の例につながっている。「恋人のもとへ運んでくれる交通手段で、道を憶えている『駒』」の反対の例となっているのが、次の例で、今度は、恋人が帰るとき交通手段としての「駒」になり、それを恋人が帰ってほしくないとひきとめるときに、恋人を帰してしまふ手段である「駒」がなければよいのに、と考えるのである。

- 739 待てと言は寝てもゆかなむ強ひてゆく駒の足おれ前の棚橋
(古今和歌集) 恋四 読人しらず

女性が、引き留めても、強いて帰る男性の交通手段としての馬の足を折っておくれ、と詠んでいる。この例は、次の後撰和歌集にもみられる。

- 939 泊まれと思男の出でてまかりければ
(後撰和歌集卷第十三 恋五 よみ人しらず)

馬の脚を折ることで、恋人が出て行かなくてもすんだかもしれないと詠んでいる。このように「駒」は、恋人の訪れ、恋人の帰りを表し、馬が道を憶えているとされて詠まれていた。「駒」は、恋歌では、恋の交通手段として詠まれていたが、次は、道綱母が喩えられたように、女性の心情を「駒」に喩えた例を挙げる。

五 天皇の飼う大事な馬、女性の心情を「駒」に喩える

「駒」を男性ではなく、女性に喩えるのはあまりないとされているが、万葉集にみられる。これは後に述べる。他に、天皇の飼養する馬に、女性が喩えられているかとみられる日本書紀歌謡の例があるが、天皇の飼養する大事な馬ということは確定している。

115 鉗かぎ着きけ 吾あが飼かふ駒こまは 引出ひきだせず 吾あが飼かふ駒こまを

阿我柯賦古磨播 比根涅世儒 阿我柯賦古磨乎

人見つらむか

比騰瀾都羅武箇 (日本書紀歌謡 孝徳天皇)

「鉗」とは、金属のように堅い木のことである。孝徳天皇の115番の歌謡では、間人皇后はしひのきさきを「駒」にたとえて、大和に行ってしまった皇后への哀惜の念を表している。馬の喩えについては、説が検討される。「従来『金木着け』『引出せず』に飼う駒を、たいせつに飼っている意味に解して、たいせつにしてきた間人皇后の比喩と解釈されてきたが、神堀忍氏は馬を厩に閉じ込めて飼うことは、たいせつにすることにはならないとして、駒は皇后の比喩ではなく、帝の飼養する駒そのものをさすとする。(『孝徳紀御製私解』『万葉』五六号) …中略…つまりこの歌が間人皇后に送られたという点を考慮すると、皇太子はもちろんあなたまでが大和に去り、自分は難波宮に取り残されて、大事な駒も厩に繋ぎっぱなしになっている、という意味に解するわけである。『人見つらむ』は、その厩にばかりいる駒を人々が見てしまったらうか、言い替えると自分の今の状況を人々は見知ってしまったらうか、もう天皇としての体面を失ってしまった、という意味になるであろう。」

この日本書紀歌謡の例は、天皇が大切に飼っている馬ということとは、

どの説であっても、確定しているので、本稿では、その部分のみの例としておく。

万葉集に女性そのものを「駒」に喩えた例が確認される。そして、「駒」は、女性の激しい心情を表現している。これは、兼家が道綱母の喩えとして、選んだものである。縄を切るほどの馬によって、女性の激しい心情を表す例は、万葉集に既にあった。

4429 宇麻夜奈流 奈波多都古麻乃 於久流我弁 伊毛我伊比之乎

於岐三可奈之毛 (万葉集卷二十 防人歌)

「おくるがへ」は、動詞の終止形を受けて反語を表す東国語特有の語法である。馬屋の縄を切って出る駒のように残るものかと妻が心情を喩えている。女性の激しい心情を駒で表現している。また、同様に、女性の心情を「放駒」に喩えている例もある。

2652 妹之髪 上(小)竹葉野之 放駒 蕩去家良思 不合思者

(万葉集卷十一 作者不詳)

「小」は、衍字とされている。「タク」は、束ね結うの意味である。逢おうとしない女性のことを、牧場の駒のように気が立っていると、「駒」に女性の心情を喩えている。このように逢わない女性の心情を「駒」に喩えているのは、『平中物語』にもみられる。

・平中物語 三十三段

また、この男、見通ひにして、人目にはつれなうて、うちには、ものいひ通はずことはあれど、あふべきことはかたくぞありける。されば、思ひは離れず思ふものから、こと女ども、この男の親族の男なる、花摘みにぞいきける。さて、山にまじりて遊ぶに、この男

の馬、放れにけり。荒れて、さらにとられざりければ、この心通は
す女ぞ、「恐ろしくもはやあるかな」。男、

春の野に荒れてとられぬ駒よりも君が心ぞなつわけびぬる
女、返し、
とる袖のなつくばかりに見えこそ摘野の駒も荒れまさるらむ

「男」の歌は、春の野に荒れて捕まえられない馬と、いつまでたっても、いうことをきいてくれない女性の心情を比較している。返歌の「女」の歌は、手綱を取る手捌きが、馬がなつくほどならば、捕えられもしましようが、そうではないのですから、いよいよ暴れて逃げてゆくのでしよう。あなたも口先だけではなく、実意が見えたらいいのですけれども、として、「なつく」人によって「駒」の荒れようが違うことが、蜻蛉日記と同じ状況で使われている。女性を馬に喩えることについては、「諸注馬を作者とするが、馬は女のイメージではない。」という注釈があるが、「駒」が女性そのものや女性の心情を表している和歌の例は、万葉集にみられることを挙げた。用例から考えると、兼家が道綱母を「あるる馬」と喩えたのは、和歌の表現史のなかでは、唐突ではなく、自然なことであった。加えて、単なる馬ではなく、御牧の馬に道綱母を喩えたのは、どのような意味があるのだろうか。御牧の馬の管理について考えたい。

六 御牧の「駒」

御牧は、朝廷御料の牧場である。「馬は馬寮めりょうが主管し、春は牧野に放ち飼かひいし秋は厩舎うまやに入れる」(厩牧令、延喜馬寮式)、「野飼のこひ」の「駒」が、和歌にあるが、「のがひ」には「野に放す」と同時に「送り却す」意味を持っていた。その用例を次にみてゆく。

1045 厭いとはるゝわが身ははるの駒なれやのがひがてらに放ちすてつる

(古今和歌集卷十九雑体 誹諧歌 よみ人しらず)

「馬は大事なもので、使用後は返却(送迎)し放牧後は戻し繋ぐ(延喜馬寮式)のに、わたしはほうりだされたの意か。」(岩波新大系古今和歌集注)と解釈されている。『新撰字鏡』には、「送却 乃我比須豆(ノガヒスツ)」とある。『新撰字鏡』の排列は、「読むための辞書」と同時に「書くための辞書」を意図している。その音や意義を求める場合とちがって、表現すべき意味に適當する文字となっている。『野飼のこひ』と『送り返す』意の『のがひ』をかけるか(岩波新大系古今和歌集注)という解釈がある。御牧の馬は、貴重なものとして、馬寮が管理し、世話をしている。「野飼のこひ」というと、扱あつかいがぞんざいな印象があるが、そうではなくて、反対に馬寮が、朝廷の馬を野に放し、また集めて厩舎に戻すという、管理して、世話をしていることなのである。

そして、馬を放牧することが、駒の綱引きとして、春の「駒」、春になって放牧する馬。気性が荒いと、求愛に逆らう喩えに詠まれているのである。

1185 引き寄せばたゞには寄らで春駒の綱引するぞなはたつと聞く(拾遺和歌集卷第十八 雑賀 平 定文)

引き寄せても、簡単には寄らないで、春駒の綱引きをするように、あれこれ逆らっている、として、求愛に逆らう喩えになっている。「駒」が女性の心情を表すことの他に、恋に逆らう感情の強さとしても詠まれていた。ここで、春駒と季節との関連が出てきたが、春の他に、「駒」は、「夏草」とともに詠まれた。道綱母も歌集では、「駒」と「夏草」を詠んでいるので、ここで確認しておく。

「夏草と「駒」の例として、後拾遺和歌集から「冷泉院東宮と申ける時」の詞書きのある例を先に挙げる。冷泉院が東宮であったのは、九五〇年（九六七年）である。道綱母の詠歌例の先蹤となる。

冷泉院東宮と申ける時、百首の哥たてまつりける
なかに

168 なつくさはむすぶばかりになりけりのがひしこまもあくがれぬ
らん（後拾遺和歌集 第三夏 源 重之）

この和歌でも「野飼ひ」の和歌表現とともに「駒」が使用されている。道綱母が、夏草の題で、「駒」と夏草を詠んでいるのが次の例である。

駒や来る人や分くると待つほどにしげりのみます宿の夏草（蜻蛉日記卷末歌集²⁴ 道綱母）

この駒と夏草の歌であるが、正暦四（九九三）年五月五日東宮居貞親王帯刀陣の歌合の題と一致して、作者の甥、理能男、為孝の依頼で代作したかとする説がある。居貞親王の母は、兼家の娘、超子で、居貞親王はのちの三条天皇である。ここでは、「駒」は、恋人のもとに来る男性を表し、先にみた古今和歌集や後撰和歌集の例の伝統的表現に添った歌となっている。

また、この「野飼ひ」ということは、兼家の六一番歌、「尾駁の駒」の引歌にもみられるのである。

男の、はじめ如何に思へるさまにてか有けむ、
女の気色も心解けぬを見て、「あやししく思は
ぬさまなること」と言ひ侍ければ

1252 陸奥のおぶちの駒ものがふには荒れこそ勝れなつくものかは（後撰和歌集卷第十八 雑四 よみ人しらず）

兼家の六一番の引歌である。「陸奥のおぶちの駒」をだし、詞書から、女性がいやがるから、「なつくものかは」と、親しく出来なくなる理由を女性側の「心解けぬ」こととしている。道綱母も六〇番の歌で、自身を「陸奥の馬」に喩えたのは、四首の贈答歌の前に、父が陸奥に赴任していることで、陸奥守倫寧の娘としての意味が背景に考えられる。

さて、「野飼ひ」が馬寮による管理、世話ということ、前にみたが、それを朝廷に届ける行事である「駒牽き」「駒迎」のことが、兼家六三番歌「白河の関」と関連している。「駒牽」は、朝廷へ献上したり、貴族に贈ったりするために、地方から良馬を引いて上洛するというこの当時よくあった状況で、八月の年中行事に「駒牽」がある。

「駒牽き」「駒迎」は、和歌によまれている。

こまひき

298 都まてなつてひくはをがさはらへみのみまきの駒にぞ有ける
（貫之集²⁵）

貫之集では、道綱母が喩えられた「へみの御牧」が使われ、都までの駒牽きについて、詠まれている。次は、「駒迎」の行事が和歌に詠まれた例である。

兼輔朝臣左近少将に侍ける時、武蔵の御馬迎
へにまかりたつ日、にはかに障ることありて、

代りに同じ司の少将にて迎へにまかりて、逢
坂より隨身をかへして言ひ送り侍ける 藤原忠房朝臣

367 秋霧のたちの駒をひく時は心に乗りて君ぞ恋しき（後撰和歌集
卷第七 秋下）

「駒迎」については、和歌史の表現として、次のような調査結果が報告されている。『屏風歌の研究 論考編』の調査によると、屏風歌の題材として、「使用回数が増加した題材」として、「駒迎」が「古今集2例」から↓「後撰集9例」へとなっている。また、「新しく登場した題材」として、駒が古今集0例から↓「後撰集7例」へとなっていて、「後撰集時代に馬を題材とすることが好まれたことが見えてくる。」ということも関連している。

道綱母にも「駒」「馬」を題材とした和歌表現が、蜻蛉日記のなかにある。それは、古今集の歌の世界が、旅によって、眼前に現れ、自然描写に表現されている。また、屏風歌の世界が眼前に現れ、それが描写されているのが蜻蛉日記中巻にみられる。

七中巻、下巻の「駒」と道綱母の屏風歌

蜻蛉日記中巻には、「駒、走り井、水の影」についての描写がある。

走り井にはこれかれ馬うちはやして先立つもありて、いたり着きたれば、先立ちし人々、いとよく休み涼みて、ここちよげにて、車かきおろすところに寄り来たれば、しりなる人、

同行の人 うらやまし駒の足とく走り井の

と言ひたれば、

道綱母 清水にかけはよどむものは (中巻 新編全集一九六〜一九七頁)

しばし馬ども休めむとて、清水といふところに、馬ども浦にひきおろして (中巻 新編全集一九四〜一九五頁)

川のあなたは絵にかきたるやうに見えたり。川づらに放ち馬どもあさりありくも、遙かに見えたり。(中巻 新編全集二〇七頁〜二〇八頁)

この「駒」と水に映る影の情景描写は、次の古今集の例にみられる。

1080 日霊女の歌 日の女神 天照大御神 (類歌 万葉集十二 309)
さゝのくまひのくま河に駒とめてしばし水飼へかけをだにみむ
(古今和歌集卷第二十 神遊びの歌)

「水飼ふ」は、水を与えるの意である。道綱母の内部にあったことが、眼前の情景として、繰り広げられ、自然描写の叙述につながっている。この和歌は、源氏物語の葵巻の車争ひで、源氏が、六条御息所の前を通るときにも使用されている。

この蜻蛉日記の情景描写の「走り井」と「駒」は、屏風歌の題材でもあった。

清慎公(藤原実頼)五十賀の屏風に

1108 走り井のほどを知らばや相坂の関引き越ゆる夕かけの駒 (拾遺和歌集 元輔)

清慎公の藤原実頼(九〇〇〜九七〇年)の屏風歌であるので、道綱母の先蹤例となる。「走り井」「水の影」がこの歌を通して、道綱母の内部にあった。そのことばが、中巻では、目の前で繰り広げられる情景と同じなのである。また、「川づらに放ち馬」とあるのは、道綱母六〇番の「なつくべき人もはなてば」と関連しているのであろう。長歌後の贈答歌四首の「駒」の情景が、道綱母の人生において、ある状況や心情を象徴して、深い意味を持つようになったと言えるのではないか。

そして、屏風歌の題材として理解していた「駒牽き」を、道綱母が眼前の情景として、詠んでいるのが次の中巻にある和歌である。

栗田山より駒牽く、そのわたりなる人の家に引き入れて見るところあり
あまた年越ゆる山辺に家居してつなひく駒もおもなれにけり (中巻

新編全集一八四〜一八五頁)

粟田山といふところにぞ、京よりまつ持ちて人來たる。(中巻 新編全集一九七頁)

屏風歌で詠まれた情景が目の前にあった。貫之集に、「清水の影」と「駒迎」を屏風歌に詠んだ例がある。このような情景は、まさにことばで理解していた貫之の屏風歌の世界が、そのまま道綱母の眼前に現れてきたことになる。

延喜六年、月なみの屏風八帖がれうのうた四十五

首、宣旨にてこれをたてまつる二十首

八月こまむかへ

14 あふ坂の関のし水にかけみえていまやひくらんもち月の駒 (貫之集・拾遺和歌集170)

中巻では、自然描写に屏風歌の世界がそのまま広がってくるような「駒」が使われている。これは、上巻の質とはまた異なり、優れた歌人・道綱母のなかで、和歌表現が、ことばを超えて、目の前でよみがえるような感動を与える。これも道綱母の歌人としての文化的背景に、後撰集時代の屏風歌の情景描写、「駒」のテーマの興隆、を考慮することで解釈が深まってくるのではないだろうか。続けて、下巻についての「駒」をみる。

蜻蛉日記下巻になると、「駒」は、懸想するという意味が全面にでてる。道綱母歌の「いまさらになかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を(下巻 新編全集 三四一頁)」は、892 大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめぬ刈る人もなき(古今和歌集・雑上・読人しらす)を引歌としている。源氏物語では、源典内侍にこの歌が使われている。「駒」というと男性の訪れというのは、源典内侍による強い印象

があるが、万葉集などでは、先にみたように、女性そのものや女性の感情を表す例があったのである。

他に、「768 生ふれども駒もすさめぬ菖蒲草かりにも人の来ぬがわびしさ(拾遺和歌集 躬恒)がある。「ささわけば…」の道綱母歌を受けて、兼道(兼家の同母兄)の歌の「霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつてしがな下巻 新編全集 三五四頁)」と道綱母歌「ささわけばあれこそまされ草枯れの駒なつくべき森の下かは(下巻 新編全集 三五五頁)」が詠まれている。「駒」の懸想する、愛情を持つという意味で使われている。「駒」は、中巻では自然描写と関連し、屏風歌世界を眼前に顕現する題材でもあり、下巻では、人生を重ねた喩えとなっているといえよう。

蜻蛉日記の「駒」の表現を整理すると、上巻では、男性が気を配っている女性としての「駒」、女性の心情、荒れる駒、放れ駒、であり、中巻では、駒牽、駒迎、「駒」と水に映る影、走り井と「駒」、屏風歌であり、下巻では、懸想する、となっている。上巻、中巻、下巻にわたって、和歌表現の幅の広さ、歌人としての豊かな表現がみられる。歌人・道綱母の日記として、「駒」に関して、深く、そして、様々な表現がみられるといえる。

ここで、「駒」の表現の調査結果によって、贈答歌四首の解釈を行う。道綱母歌六〇番「なつくべき人もはなれば陸奥のむまやかぎりにならむとすらむ」は、男性が気を配っているはずの馬、貴重で世話をされているはずの御牧の馬に道綱母は自分を喩え、「なつくべき」世話をしてくれる人に兼家を喩えて、兼家に気を配ってもらいたい意味を表現し、それを切迫して願う心情を、放たれる「馬」とすることで、激昂した女性の激しい感情を表している。

兼家歌六一番の「われが名を尾駁の駒のあればこそなつくにつかぬ身とも知られぬ」は、道綱母が心情を放たれる「駒」と表現したことを

受けて、野飼ひの駒、引歌に後撰和歌集、また、平中物語にみられるような女性のかたくなな感情の意味を含ませ、あなた（道綱母）はそうかもしれないが、自分（兼家）はそうではないのだから、親しめると返している。また、長歌と「なつくべき」の歌では、「馬」が道綱母だったので、その表現を受け止めつつ、反転することができるとなっている。六〇番と六一番をつなぐ「いかが思ひけむ」にも、この両者の反転の可能性がみてとれる。あなた（道綱母）は陸奥の馬で、自分（兼家）は尾駁の駒として、私とあなたのどちらが荒れていてなつかないのかという比較にもなる。「われが名を」と「駒」に兼家自身を喩えているが、どちらともとれるような反転の可能性を残している。蜻蛉日記の和歌で「身」を詠む場合、通常、詠者自身を指すが、道綱母と兼家の二人を指しているのが一例みられる。道綱母と兼家の両者のどちらかを意味し、反転の解釈が可能であることがこの和歌の特質であろう。

道綱母歌六二番「こまうげになりまさりつつなつけぬをこなたえずぞ頼みきにける」は、「こまうげ」は、来ることを厭う意味であり、道綱母は、気を配ってもらえない兼家をそれでも頼りにしてきたと返す。道綱母の五八番の長歌「命あらばと たのめこし」とあったが、兼家の五九番の長歌には、これについての回答がなかった。長歌では解決できなかった問題で贈答歌四首で取り上げ、兼家が冷たい態度だとしても、自分は頼みにしてきたという。

兼家歌六三番「白河の関のせけばやこまうくてあまたの日をばひきわたりつる」は、屏風歌の題材としての駒迎の意味を読み取る。荒馬のよくなかたくなな感情のあなたのせい、ここまでで過ごしてきてしまったけれど、白河の関の駒迎のように逢いに行きますから、と解釈する。

まとめ

長歌後の「駒」の贈答歌四首について、①なぜ朝廷所管の「御牧」の「馬」に喩えられているのか、また、②「馬」「駒」をなぜ男性ではなく

女性の道綱母に喩えているのか、について総括する。

①なぜ朝廷所管の「御牧」の「馬」に喩えられているのかについては、蜻蛉日記の長歌後の贈答歌の「駒」は、御牧からの馬が馬寮で主管されるべき貴重なもので、世話をすべき男性が気を配るものとして使われていることを先蹤例に挙げた。②「馬」「駒」をなぜ男性ではなく女性の道綱母に喩えているのか、については、放ち駒や荒れる駒は、激昂した女性やかたくなな感情の女性の心情を表わしていること、これも先蹤例を挙げて検証した。

また、蜻蛉日記の「駒」の表現を追って述べたが、歌人としての道綱母の内部にあった万葉集や古今集、屏風歌の情景が眼前に広がり、ことばが息吹を持ち、道綱母の和歌表現の豊かさが表れている文学的価値を述べた。

そして、この二点から贈答歌四首の意味を明確化して、解釈することができた。贈答歌四首では、長歌の五八番と五九番では解決しなかった問題である「頼みきにける」この今の現在の時点を問うことになっている。それは、長歌での切迫した振り返りの非日常の時間から、日常の時間への回帰となっている。叙述としては、比喩どおりの放ち駒のように激昂した感情の沈静化になっているといえる。そして、これまでの過去の二人の関係を長歌で振り返り、長歌後の贈答歌四首では、現在の二人の関係を「駒」で表現していると考えられる。以前から、道綱母の内部にあった「駒」という表現が、長歌による過去の振り返り、兼家との和歌の贈答歌によって、人生のある状況を明確にし、さらなる表現となっている。

注

(1) 本文の引用(傍線、□を付けたところがある)は、新編日本古典文学全集『土佐日記・蜻蛉日記』菊地靖彦・土佐日記・木村正中・伊牟田経久(蜻蛉日記)校注・訳 小学館 平成七年一〇月一〇日による。贈答歌四首の引用文の

右の表記は、宮内庁書陵部桂宮本との異同を示す。

(2) 空白期間について、「蜻蛉日記上巻空白期間の意味―章明親王との和歌贈答―」の高見がある。『蜻蛉日記の表現と和歌』川村裕子 笠間書院 平成十年五月十五日

(3) 対訳日本古典新書『かげろふ日記』増田繁夫 創英社・昭五三

(4) 『蜻蛉日記全注釈上・下』柿本奨 角川書店 昭和四一年

(5) 『かげろふ日記』(日本古典文学大系) 川口久雄 岩波書店 昭和三二年

『へみの御牧』『片飼の駒』をうけて馬の縁を離れない

(6) 注(4)に同じ。「われが名の歌(六一) この歌の意を兼家は、その長歌においても詠んでいるから、作者と違って、兼家の態度には一貫性がある。とにかくこの歌を見て、作者はほっとしたであろう。」兼家の態度(道綱母を慰める) ことにおいては、一貫性がある。

(7) 『蜻蛉日記』(日本古典文学全集) 木村正中・伊牟田経久 小学館 昭和四八年「長歌に直接引きつづいて取り交わされたやりとりとはかぎらない。むしろ長歌の末部と類似した素材の、別の時点の贈答歌を書きついだとみるべきか。長歌とは異なって以下の贈答には道綱のことは詠まれていない。」

(8) 注(1)に同じ。「長歌から引き続くように見えるが、長歌の結び道綱のこととは『なつくべき…』の歌以下に引き継がれず、また、『白河の…』の歌にかがえる駒牽は八月の行事で、次の『七月五日』にはつながらず、『天の川…』の歌も『白河の…』の歌の返歌とは見がたい。ともに類似した素材を書き継いだものと思われ、『なつくべき…』の歌以下、歌で張り合ってきた文脈はここで切れる。」二一〇頁

(9) 『蜻蛉日記注解(十五)』秋山虔・上村悦子・木村正中『解釈と鑑賞』昭和三七年五月〜昭和四六年三月「措辞のうえでつながりを否定することはできないけれども、作者の詠歎的な挑みの姿勢を巧者に受け流す兼家の応答によって、さらに作者のうちに悲痛な慕情を駆り立てていくこの贈答歌群の進展が、作者の長歌を十分に受け止めきれぬままに自己完結した兼家の長歌から、ただ惰性的に続いたとは思えないのである。二人の関係の微妙な陰影を再現しよう

とする作者の連続的な意識が主体的に働けば働くほど、一層長歌とこの一段との間に存在する断層を明確に浮き出させる。両者は内部的に深いつながりをもちながら、それぞれに別個の心象風景として書き継がれているのであって、それを単純に連続した歌の応酬としてのみ読過したのでは、やはり不十分といわざるをえないであろう。」(傍線は、本稿引用部分)

(10) 注(4)に同じ。二六〇番の歌では、兼家の高姿勢の前に、作者は折れた。もはや恨みごとはいわず、もっぱら将来の身の不安に動揺する気持ちを訴えた。そこでは兼家を『なつくべき人』といい、その飼育者から見放された馬に自身を譬えた。果してそのように兼家が見放したのなら、すぐには返事をよこさないかもしれない。そうであっても、ふしぎのない所である。ところが折り返し返事が来た。兼家は作者が折れるのを待ち構えていたのであろう。返事を受け取って、作者の自尊心は、いくぶんなだめられたはずである。しかも文面は、作者の譬えとは逆に、兼家自身を馬に、作者を飼育者に譬え、飼育者がやさしくすれば馬も寄りつこうという。作者の考え方と裏腹であり、馬を手放す気のないことも同時に表明している。作者はほっと胸をなでおろしたことであろう。『いかゞ思ひけむ』は、そうした兼家の出方が、真意から出たことなのか、測りかねたということであろうが、それをのみ言って、作者の安堵感は明言しない。批判を加えるなら、ずるさというべきか、女性らしさというべきであろうか。安堵感は弱気に通ずる。弱気は反省を呼ぶ。六一番の歌はそこにつけ入っている。」(傍線は、本稿引用部分)

(11) 『蜻蛉日記の文体形成―地の文に融合する引歌』(『王朝の文学空間』一九八四年三月十日 東京大学出版会九六頁〜一二二頁)「その風景、生活の中に自分の内なる悲しみを客観的に見出して行くということなのである。」「自然・風景の観照は、苦渋を含んだ人生観照ないし自己反省と互に媒介しあう不可分のものとして理解されねばならない。」とされ、天曆十年「吹く風に」と「色変はる」の記事を検証されている。

(12) 日本古典文学全集『古事記・上代歌謡』萩原浅男『古事記』・鴻巣隼雄校注・訳小学館 一九七三年十一月五日 以後の上代歌謡の引用もこれによる。

- (13) 『萬葉集』鶴久・森山隆 桜楓社 平成三年五月重版 以後の万葉集の引用はこれによる。
- (14) 新日本古典文学大系『後撰和歌集』片桐洋一岩波書店 一九九〇年四月二〇日 以後の後撰集の引用はこれによる。
- (15) 日本古典文学大系『和漢朗詠集 梁塵秘抄』全訳注 川口久雄・志田延義 岩波書店 昭和四〇年一月六日
- (16) 新日本古典文学大系『古今和歌集』小島憲之・新井栄蔵 岩波書店 一九八九年二月二〇日 以後の古今集の引用はこれによる。
- (17) 『古代歌謡全注釈日本書紀編』土橋寛 角川書店 昭和五十一年八月三十一日
- (18) 日本古典文学全集『平中物語』清水好子 小学館 一九七二年十二月二〇日
- (19) 注(3)に同じ。
- (20) 『野飼ひの駒—語史論集—』山内洋一郎 和泉書院 一九九六年五月十日
- (21) 『新撰字鏡』天治本 京都大学文学部国語学国文学研究室編 臨川書店 昭和四十二年十二月十五月初版 平成十一年十一月三十日再版 七七四頁
- (22) 新日本古典文学大系『拾遺和歌集』小町谷照彦 岩波書店 一九九〇年一月十九日
- (23) 和歌古典叢書『後拾遺和歌集』和泉書院 川村晃生校注 一九九一年三月十五日
- (24) 注(1)に同じ。
- (25) 注(1)に同じ。四〇五頁
- (26) 貫之集 『私家集大成中古Ⅰ』和歌史研究会 明治書院 昭和四十八年十一月二十五日 表記を改めたところがある。
- (27) 『屏風歌の研究 論考編』田島智子 和泉書院 二〇〇七年三月二〇日 二八九—二九〇頁

【付記】本稿は、日記文学研究第五六回大会(二〇〇九年八月二十一日於國學院

大學)における口頭発表を基に、加筆補正したものです。席上、ご教示を賜りました浅田徹先生、大倉比呂志先生、川村裕子先生、渡辺久寿先生、発表後にご教示を賜りました諸先生方、そして、司会の斎藤菜穂子先生に深く御礼申し上げます。(二〇一〇年十月四日受稿)

Study of *KAGERO NIKKI*, the First Volume:
The Exchange of the *Waka* “*koma*” after the *Choka*

Saori Shibamura

Abstract

In the first volume of *KAGERO NIKKI*, Kaneie returned his *choka* to *Michitsuna-no-haha* after her *choka*. Kaneie compared *Michitsuna-no-haha* to a horse at *Mimaki* under the control of the Imperial Court. After the *choka*, they include “*koma*” and “*muma*” in all four *wakas* that are exchanged. Expressions like “*koma*” or “*muma*” in the *KAGERO NIKKI* can be considered as long-established and traditional expressions. This research offers a new interpretation of “*koma*” and “*muma*.”

Keywords: *KAGERO NIKKI*, expression, *koma*